

# 保戸島の「イノコ」行事について

津久見市保戸島小学校教諭

野崎一郎

イノコヒトツイワイマシヨウ(亥ノ子、祝い)イノコイノコ

イノコモツチヤツツカイナ(亥の子餅は搗くかいな)ツノノハエタコレン(この家)

コレンノシタデゼニサンモンミシケチ(銭三文、見つけて)

イチモンデカキコウ(柿買う)

ニモンデシヨウリコウ(御飯の鍋つかみ用の草履)

シヨウリヤノオパンガ(おぼさん)コガレタママヨ(焦げついた御飯)

シヨウバイシヨウバイシヨウバイヨ

オカミサンノカタビラ

ビンボウガミハデチイケ(出ていけ)

フクノカミハイツチコイ(入つてこい)

ヨーイシヨ　ヨーイシヨ

オーイエノゴハンシヨ(御家の御繁昌)

こんな歌をうたいながら、鳥の子ども達は朝早くから、家々を「いのこづき」してまわる。

むかしは、もつとはやく朝四時すぎには起きていたということだが、今では六時ごろからまわり始める。(一般の農村とはだいぶ様子が違っている) <sup>[註1]</sup>

この島でも「いの子」の行事は、他の地方と同じように、子どもの行事になってしまった。子どもの行事というよりも、子どもが自分たちのこずかいを得るための具となつてゐる。「いの子」のいわれも何も知つてはいない(あたり前のことかもしれないが)。したがつて、「いの子」をつく道具——(島ではそのまま「いの子」と呼んだり、「つきて」と呼んだりしている)——も、きわめて簡略化されてしまつてゐる(図参照)。

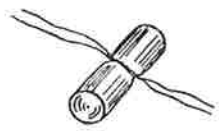
前日になると、子どもたちは、直径七—八糎前後で、長さ二十糎ほどの丸太の木片を見つけ、その木片の中央の部分をけずつて、その部分にヒモをくりつける。ヒモは二本だけである。

今でこそこんなに簡略化されているが、むかし(といつても五十年輩の人が子どものころ)は、これほどかんたんなものではなかつた。前日になると、子どもたちは、部落の密集した側とは反対の豊後水道側にある「セノハマ」(部落から歩いて片道四十分くらい)まで石を求めにいつていた。

ハマで今日の木片くらいの細長い石を探し求め、その石に、マグロ用の延縄(島では俗にシビナワと呼び、マグロ船をシビナワセンと呼ぶ)のマヤ <sup>※</sup>(※つな)をイワエ <sup>※</sup>つけて(※結ぶこと)、つくつていた。石から今日の木片にかわつた年代と理由は、さだかではないが、宇和島の例などから類推すれば島の道路(といつても人二人が並べる幅しかない)がコンクリートで舗装されたところに求められるのではないかと思う。 <sup>[註2]</sup>

とにかく、子どもたちは、この「つきて」をつくつてしまえば、準備はととのつたわけで、あとは当日の作戦をねるだけである。

【参考図】



現在の「つきて」

木片  
直径 7~8cm  
長さ 20cm位

この作戦が必要になつた因は、もとをただせば「いの子」が、子どもたちのこずかいを得るための具となつたことにあるといえるのではないだろうか。

以前は、各家々を順にまわつていたが、今日では、子どもたちは「イノコツカセーノ」と家主のゆるしを得てからしかつかない。それ以外の家でも、一銭もくれないし、叱られるのがせいぜいだからである。そこで子どもたちは、「いの子」をつかせてくれそうな家をマークしておき、いちはやくそこにかけてつける。そのために前夜に話しあつて、時刻・家などを決めておくのである。

また、むかしは、男の子だけしか「いの子」はつかなかつた。今日では、女の子も男の子の間げきをぬつて家々をかけずりまわつている。このことも「いの子」が子どもたちのこずかいを得るための具となつて、物語つていえるのではないだろうか。

さて、当日になると、子どもたちは、朝はやくから起き、前夜の作戦にもとづいて、二人一組になつて先を争つて家々を駆けまわる。今日では、ほとんど二人一組となつて、この制のみは、むかしからの風習を伝えていられるらしく、島の老人たちの知る限りでは、二人一組を原則とし、たまには、四人一組となることもあつた。その場合でも「つきて」の形式には変りはなく、つなは二重にして、くぐれば※（※巻きつけて結べば）よかつた。

この島においても「いの子」は子どものもものになつてしまつたとはいじめの部分に書いたが、すべてが完全にそうならなつてしまつたわけではない。「いの子」のいわれは伝えられていないが、この日を祝うならわしは、今日の大人の中にも残つてい

ていく。母親の生きている間は、ずつとこれをつづける。  
【註3】

また、この日の夕方になると、中島と呼ばれる島の先端にある「カンノンサマ」（観音様）に参る者もいる。その中のある者は、このカンノンサマ【註4】の前で酒宴をひらく。これら大人の行事は、遠洋漁業で男性人口の少ない島においては、女性を中心

となつてゐることも忘れてはならない実態ではなからうか。

〔註1〕一般に、農村のイノコ（亥の子）行事では、次のような歌がうたわれている。大分地方の例をあげると、

コンヤノイノコモチ

イワンモノハ

オニウメ・ジャウメ

ツノノハエタコウメ（下略）

村中の子供たちが二三人あるいは四五人づつ一団となつて、各家々をたずねて廻る。ワラを一把（両手でかこみ、つかめる位の大きき）、長さはワラの長さ、束ねてナワでぎりぎり巻き立てたものを持つて、ソボ（前庭）をたたいて廻る。春と秋の二回、亥ノ子の日に行なわれるが、家々ではこうしてやつて来た子供たちには、みんなにモチを分けてやつたものである。

〔註2〕四国の宇和島地方では、かつては、平たい石に（金属製の）環をつけて、いの子をついていた。しかし、道路がコンクリートで舗装

された時、このいの子と行事そのものがやまつてしまつたといふことである。

〔註3〕この習慣のいわれは、よくはわからない。旧暦の九月九日にも、「くり節句」と称して赤飯をたき、同じように嫁は実母のところに行き、それを持つていく。

島では、むかしから、赤飯は正月のはじまりを意味するといふ。

また、赤飯をたくと、家の者はみんなそれの方のみ食べる。前日からの残り飯には手をふれない。継子など、日頃は腹いづばいに食へることのできない者にとつて、この日ばかりは思う存分に食へることができる。このような日は、九月九日に限つたことではないのだが、むかしから人々は「またもごんせ九日さま」といつて、「くり節句」の来る日を待つたといふ。

〔註4〕この「カンノンサマ」は、旧暦九月九日の「くり節句」の時、あるいは、マグロ船の船出に際して、航海の無事と豊漁を祈つて行なわれる「こもり」（籠り）のときなどにも、島民の祈りを受けている。

（一九六一・一一・三〇稿）